
正しい力の使い方

桃源世界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正しい力の使い方

【Nコード】

N3317Z

【作者名】

桃源世界

【あらすじ】

兄は有名専門校の首席、妹は歌唱コンクール全国1位、両親は共に高名な家柄の出身。

そんな優秀な遺伝子を受け継いだはずの、神谷修平だが、一際目立つ所は一切ない。

3年前に設立された過去に類を見ない、いわゆる魔法と科学の混在した学園に入学するも、その人生はいつになったら報われるのか。

1話 プロローグ(前書き)

思いついたので書いてみました。

素人の書いた稚拙な文章ですが…

お読み頂けるのであれば、よろしくお願いします。(・)(・)ペコリ

1話 プロローグ

俺、神谷修平かみたじゅうへいの送る人生の難易度はハードモードに違いない。そう確信したのは、小学生の頃だ。

父は有名会社の社長、母はその父に見定められた才色兼備の持ち主。

兄は世界屈指の文武両道者、現在は有名専攻学園の首席を維持している。

妹は母同様、才色兼備の性質を持ち合わせ、現在は歌唱コンクール全国1位の實力者だ。

遺伝子というものは働き者らしい、親の力を、確実に子に受け継がせている。

ただ、俺、神谷修平の遺伝子は怠け者なのだろう。優秀どころか、普通ですら片腹痛い。

容姿の方も、身長175センチ、体重62キロ、黒髪黒眼という大して特徴もない格好。

兄、妹のように一際目立った部分は、唯一つ存在しない。

優秀な家族の下に生まれてきた凡人を、蔑む視線が痛いのは否めない。

小学、中学と、陰口を叩かれなかった日はないだろう。

無論、それは中学最後の卒業式でも変わらなかった。

幾多の暴言を囁かれ、その度に己の無力感に蹲まっていた。

それは何処かで、俺が兄と妹に勝る部分はないという劣等感が悪い方向に堕ちた結果だ。

だが、今は違う。
空虚な人生を抜け、俺は兄と同じ土俵に立つことを決意した。
そうして受験した、兄が所属する学園。

エドウィン軍兵魔法科学専攻学園、総称名、G（軍式）M（魔法）K（科学）養成校。

地球が育つ過程の中で行われた暴挙に環境問題、その全てを解決するために3年前、この国にも設立された、今までに類を見ない教育機関だ。

この学園では、当時瓦解した最先端の魔法から、後世に受け継がれなかった科学の全てを結集させた様々な技術が眠っていると聞いている。

当時、自然災害で消滅した敷地を全面的に使用し設立されたため、勉強環境、運動環境、その全てが人工的な技術で造られたとも聞いている。

専門分野は、魔法を基盤に置き、科学の力を導入した、魔法科学（魔学）。

科学を基盤に置き、魔法の力を導入した、科学魔法（科法）。
そして、軍事全般を賄う軍事練兵（軍兵）の3つの班を主軸として置いている。

俺がその学園に入学できたのは奇跡といっても過言ではない。
定員数60名、入学希望者数は10倍の約600名、試験内容は基礎教科と実技だった。

兄に剣術を指導してもらったことができなかったならば、落ちてい

ただろう。

経緯はどうあれ G M Kの入学式を終えた俺は、未来の学園生活に希望を抱いていた。

そして始まる、俺の人生観を180度は変えるであろう、その学園生活が。

* * *

「迷子になった…。」

G M Kが所有する、校舎と同時期に併設された寮、ゆめゆめ夢跡寮内。様々な設備に加え、総部屋数、三百は下らない。

中には光学螺旋レーザー室などといった、無駄に響きが男心をくすぐ擦る部屋も在る。

ただ、入念に戸締まりをされているせいか、中は覗けない。

入学式のパンフレットに挟まっていた情報によると、俺の部屋はZ 1という相部屋だ。

ぶつちやけてしまうと、かれこれ5分間は廊下を彷徨っているが、未だに辿り着かない。

広すぎる寮、移動に不便な気がしないでもない、というか不便だろう。

「設計ミスだろ明らかに…くそつ、建築会社の陰謀か…」

一度戻って、寮監にでも道を聞いた方が良いのだろうか、少し迷う。

方向音痴と笑われるのがオチか、入学早々災難すぎる。

「寮内の地図が配布されないのも問題だな…後で直訴するか…」

パンフレット片手に髪の毛を乱雑に掻きむしる。

困った時の癖だ、何度、家族と幼馴染に注意され続けてきたことか。

さて、どうしたもの…、

「コラアアアアアア！」

…！？

強烈な怒声が俺の耳を劈いた。

「いい加減に、その癖直しなさい！」

「っ、美咲か」

振り向き、彼女の顔を見た。

いましずみみん
今泉美咲、幼馴染の間柄にして、俺の知る世界では最強の女。

中学の頃は、女子バスケット部のキャプテン兼エースを務めていたと聞いている。

同学年ということもあったので、それなりに世話にはなつたし、世話もした。

俺より少し身長が低い、漆黒のセミショート。しなやかな足腰と、華奢な身体つきに、服の上からでも分かる包容力のありそうな胸、反則的な身体の持ち主だ。

「おじ様に言うわよ…？」

「悪いことは言わない、やめておけ。もとい、やめて下さい」

頭を下げる、土下座しても良い気分だ。

美咲は、ふふん、と意地の悪そうな視線で俺を見つめて来る。

今の場面を美咲に言われるとはツイていない、親父に漏れないことを切に祈る。

「というか、女子寮はこっちじゃないだろうが」

「ああ、迷ったのよ」

「さらりと言つなよ…」

既に関き直っているのだろう、苦悩している様子はなさそうだ。

「もう事務に聞こうかな、うん、そうしましょう」

そして勝手に自己解決するのは、幼少の頃から全然変わってない。

「ところで、修平の所属班ってG班よね」

美咲が指すG班というのは、軍事班のことだ。

ここでは魔法科学班はM班、科学魔法班はK班、軍事練兵班はG班と略されている。

「つか、俺の能力だとG班が限界だしな」

「なら、わたしと一緒にね！」

「お前が、G班…？」

瞠目する。

昔から体力に自信のある女ではあったが、こいつは何気に勉強もできる。

てつきり、M班かK班のどちらかだと勝手に解釈していた。

「な、何よ…わたしが、G班だといけないわけ…？」

「別に問題はないが、体力的に厳しいぞ」

「どの班だつて、厳しいのは変わらないわよ」
「「もつともで」

納得した、確かにその通りなのである。

「…アンタつて、ホントに鈍感よね。子どもの頃からだけど」
「なにがだ」
「何でもないわよ、修平のバカ！ おじ様にさっきのこと言いつけてやる！」

急に怒ったかと思いきや、美咲は俺の行き先とは逆方向に走り出す。

「あ、ちょっと待て、それはマジで洒落にならない！」

思い届かず、俺の大声を振り切つて美咲は去ってしまった。

……、携帯電話の電源をOFFにしておこつ。

2話 相部屋

人は予想だにしない事態に陥った時、総じて奇怪な行動を取ることが多いらしい。

無論、群集心理に長けた人物ならばその行動を回避することも容易ではあるが、生憎、落ちこぼれ代表の俺こと、神谷修平がそれを回避するのは不可能といっても過言ではない。

事件は、苦勞の末に見つけた自室前で起こる。

「開かないぞ、この扉…」

普通に手動で開けられるタイプのはずだ、押すと開けることが出来るはず。

ドアノブを回して押したり引いたりもしてみるが、動かない。

9

「鍵でもかかっているのか…?」

扉の隙間を見る。

見て分かったが、鍵はかかかっていないようだ。

故障しているわけでもないだろうし、何が原因なのか理解できない。

「くそっ」

ガチャガチャと音を立て、必死にドアノブに抵抗の意志を見せる。体重をかけて、押してみる。

「Oh sit!」

ガチャガチャガチャ!

最早、形振り構^{なり}っていられる状況じゃない、険相な顔つきで救いを求める。

だが、扉は一向に開かない。

何か特殊な開け方でもあるのか、俺がそれを見逃しているだけなのか、しかし、パンフレットからその内容のみを探し出す猶予など、とうにない。

絶体絶命の状況下、俺は眼を見開いた。

「そうか、わかったぞ!」

謎は全て解けた。

俺は扉の前に正座し、お辞儀する。

「扉様、開けて下さい、お願いします!」

きつと、この扉は心を持っているに違いない、俺はそう確信した。最新鋭の設備だ、こうやって部屋主にふさわしい人物なのかを見極めているに違いない。

部屋主として、扉に対して礼儀を保たなければ真の部屋主とは言えない、ということだ。

俺は一言、「勝った」、そう心の中で呟き、首を上げた。

.....。

「NOOOOOOOOOO!!」

ガチャガチャガチャガチャ!

俺がバカだった、扉に心があるわけがない、無駄な時間だった。

もう、尿意でどうにかなりそうだ、右脳と左脳が同時に思考停止寸前まで来ていた。

そこに、救世主が出現する。

「な、何してるの...お前...?」

長身痩躯の男、自然に揃った茶色の髪に、引き締った筋肉が体格を見栄えさせる。

鋭い顔が印象的だが、反対に、場所を問わず、自然に声をかけられそうな柔和な雰囲気も持ち合わせているような気がする。

「と、扉が...扉があ...!!」

「と、扉...? ちよい、貸してみろよ!」

一声かけられ、扉の前を占拠していた俺は、即座に避けた。

男が扉に力を入れて押すと、開かなかった扉に異変が起こる。

「お、おお...!!」

徐々に開き始める扉、男が更に体重をかけると、扉は完全に開いた。

「ふう…こんなところ…」

扉を開ける、ただ、それだけの行動で男2人は汗だくになった。部屋の中に入り、俺はトイレに繋がっている扉を反射的に開けた。ホテルにあるような、ユニットバスとトイレが一緒にあるタイプだ。

扉を閉めて、鍵を閉めると、俺は先ほどまでの苦勞を一気に解消する。

「い、生きてるって素晴らしい…！」

極限の状況までの我慢、そして解放。

誰もが一度は体験し、そしてこの感動を分かち合うことが出来るはず。

事を終え、部屋の中にいるもう1人の人物に話しかけた。

「サンキユ、助かった」

「おう、困った時はお互い様じゃねえか、お前がオレの同室者だろ？」

「ああ、多分そうだ。俺は、神谷修平、G班所属予定だ」

「オレは朝倉清二だ。M班所属予定、これからよろしくっ！」

握手を交わす、出会って間もないが気楽に付き合って行けそうな感覚がする。

俺たちは、暫しの間、荷物整理をしながら、置き場所などについて話し始める。

部屋の中は7、8畳程度の広さに、先ほど俺が入った浴室とトイレを足す程度だ。

片隅には、備え付けのロッカー、その反対側に二段ベッドが置い

である。それと、自分たちで置き場所を決めるとでも言わんばかりに、2つの机と椅子が適当に置かれていた。

「修平、上か下かどっちがいい？」

二段ベッドの場所割だろう、1度助けて貰った身分の俺は清二に選択権を譲る。

「俺はどっちでもいいよ、清二が選べよ」

「お、そうか。なら、オレは下がいいな」

そう言うのと、清二は圧縮されていたのであろう布団を取りだすと下に敷いた。

俺も、上の段に繋がる階段を利用して布団を敷いた。
だいたい荷物整理が付き始めると、お互いに楽な体制になる。

俺は上で布団に転がり、晋三は下で布団に転がった。

「さつきは本当に助かった。お前いい奴だな、清二」

「なに、どうってことねえよ。つか、あの扉クソ重いよな、どういう仕様だよ」

「だよな、押しても引いても開かないし、もうダメかと思った」

「後でオレ達の部屋だけなのか、事務に問い詰めてみようぜ」

「ああ、そうしよう」

俺たち2人は他愛もない会話を繰り返して続けた。

数十分後、2人一緒に示し合わせると、俺たちは部屋の鍵を閉め、夕食に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3317z/>

正しい力の使い方

2011年12月11日15時05分発行